

冷凍庫から出るたびに  
歩き方が変わる僕を2  
年見ていた工場長に吹  
雪の夜に暴かれるカン  
トボーイ

「ッ……んん……っ♡♡」

防寒着の下で、太腿が勝手に擦れ合う。

マイナス25℃の冷凍庫から出て、まだ3分と経っていない。全身は凍えている。指先の感覚はとっくに消えた。なのに——腰から下だけが別の生き物みたいに脈を打って、ズキ……♡ズキ……♡と熱を溜め込んでいく。

いつもの症状だ。

冷凍庫に長く居ると、こうなる。身体の芯が冷えれば冷えるほど、あの場所だけが反比例するみたいに充血して——どうしようもなくなる。

「……っ」

歩き方が変わっているのは自分でもわかる。がに股になりかけるのを必死に抑えて、休憩室のドアを開けた。

誰もいない。

福田はインフルエンザで休み。今夜の夜勤は僕と、工場長の氷室さんだけ。

ソファに腰を落とした瞬間、暖房の温もりが防寒着越しにじわりと染みてきて——それが逆に、下半身の疼きを煽った。  
(やめて……っ♡♡温まったら……余計に……っ♡♡)

防寒着のジッパーを下ろせない。脱いだら、ワークパンツの股の辺りが濡れているのがわかってしまう。カントが冷氣に反応して分泌した、あの粘つく液で。

僕は——男だ。

戸籍上も、見た目も、声も。肩幅は狭いし背も164しかないけれど、胸の膨らみはないし、喉仏だってある。

ただ、股の間だけが。

生殖器だけが、女のそれになっている。

カントボーイ。

24年間、この身体と生きてきた。東京の大学を中退して、誰ひとり知り合いのいない北海道の製氷工場に逃げてきて2年。紋別の冬はマイナス18℃まで下がる。その寒さが、皮肉にも僕の身体の秘密をいちばん刺激する。

「——顔が赤いぞ」

「ッ!？」

振り向くと、休憩室のドアに氷室さんが立っていた。

身長186センチ。肩幅の広い、浅黒い肌。短く刈り上げた黒髪に薄い無精髭。工場で十年以上氷を扱ってきた手は節くれだって、大きい。歳は33。笑ったところを一度も見たことがない。

無表情。いつも通りの、感情の読めない顔。

「だ、大丈夫です」

声が震えた。喉の奥が引き攣って、最後の一音がかすれる。

氷室さんはテーブルの上にコーヒーの缶を置いた。ブラック無糖。僕が冷凍庫作業の後にいつも買う銘柄と同じやつだ。何も言わずに出ていこうとして——足を止めた。

「……吹雪、ひどくなってきた。シャッター閉めた。今夜は帰れない」

「……え」

「事務所か休憩室で夜を明かすしかない」

淡々と事実だけを告げて、氷室さんは廊下に消えた。

帰れない。寮にも戻れない。シャワーも使えない。つまり

——

(い、いつもみたいに……自分で処理……できない……っ♡♡)

冷凍庫作業の後は必ず、寮のシャワー室で声を殺して自慰をする。それが2年間のルーティンだった。そうしないと、カントの充血がいつまでも収まらない。

今夜はそれができない。

しかも氷室さんと二人きりで、朝まで。

防寒着のジッパーを握りしめたまま、ソファの上で膝を閉じた。太腿の間でぐちゅ……♡と微かな音がして、血の気が引いた。

\* \* \*

深夜3時を回った。

製氷機にトラブルが出て、冷凍庫内の確認が必要になった。

「俺が行く」

「い、いえ、僕が行きます」

自分から志願した。矛盾しているのはわかっている。冷凍庫に入れば症状が悪化する。でも、暖房の効いた事務所で氷室さんの隣に座っている方がもっとつらかった。温められると、カントが疼いてどうしようもない。いっそ全身が冷え切った方が、紛れる——そう思った。

間違いだった。

吹雪の影響で、冷凍庫の温度がマイナス 30℃近くまで下がっていた。

15分で限界が来た。

「ッ……あ……っ♡♡」

膝が崩れる。ブロックアイスの隙間に手をついて、かろうじて倒れるのを堪えた。手のひらに氷の冷たさが突き刺さる——痛いほど冷たいのに、身体の奥だけが真逆の熱を放っていた。

(だめ……っ♡♡ いつもよりひどい……っ♡♡ お腹の中……っ♡♡ 熱い……ッ♡♡)

防寒着の下の、ワークパンツの内側が——じわ、と濡れていくのがわかる。愛液だ。極端な冷気に刺激されて、カント

が暴走している。膣壁が勝手にきゅう♡きゅう♡と収縮して、中から溢れ出した液が太腿の内側を伝った。

立てない。

白い息が天井に昇っていく。冷凍庫の機械音だけが、無感情に唸っている。

インターホンのボタンを押す指が震えた。

「……ひむ、ろ、さん……」

「——今行く」

30秒で氷室さんが来た。冷凍庫の重い扉を引き開けて、白い息を吐きながら僕を見下ろす。蛍光灯の明かりが氷室さんの背後から差して、輪郭だけが光っていた。

「柊。立てるか」

首を振った。声を出すのも怖い。震えた喉から何が漏れるかわからなかった。

氷室さんが屈んで、僕の身体を抱え上げた。横抱き。大きな腕が背中と膝裏に回って、子供を運ぶみたいに軽々と持ち上げられる。

防寒着越しでも体温が伝わった。氷室さんの身体は、マイナス30℃の冷凍庫の中でも——温かい。

「んっ……♡♡」

その温もりが、下腹部に直接響いた。

(やだ……っ♡♡ 氷室さんに、抱きかかえられてるだけで……おまんこが……♡♡)

キュン♡と奥が疼く。認めたくない。こんな反応を、この人の腕の中でしたくない。

氷室さんは無言で僕を冷凍庫から運び出した。廊下を歩く革靴の硬い音。暖房の風が頬に当たって、凍った産毛が溶けていくのがわかる。休憩室のソファに横たえられた。

「防寒着脱がすぞ。低体温症の確認をする」

「っ、だ、大丈夫です……っ！ 一人にしてください……っ」

「駄目だ。業務上の責任がある」

有無を言わせない声。氷室さんの太い指がジッパーを掴んで、下ろした。

「やめ……っ♡♡ 触らないで……っ♡♡」

抵抗する力がない。冷氣と症状で全身の筋肉が言うことを聞かない。インナーを捲られて、冷え切った腹が蛍光灯の下に晒された。烏肌の立った白い肌。防寒着の内側に閉じ込められていた汗の匂いが、微かに立ち昇る。

氷室さんの手のひらが僕の腹に触れた。

「……冷えてるな」

事務的な確認。硬い掌。ざらついた指紋の感触が腹の皮膚を押す。でもその手が、ゆっくり下へ滑っていった。ワークパンツのベルトラインに指先がかかる。

「ここ、脱がすぞ」

「だめっ……！♡♡ そこは……っ！！」

必死で腰を振ったけれど、氷室さんの手は止まらなかった。  
ワークパンツのボタンを外して、ジッパーを下ろして——ず  
るり、と引き下ろす。

下着が露わになる。

グレーのボクサーパンツ。股の部分が——ぐっしょりと、  
濡れていた。

「……………」

氷室さんの手が止まった。

蛍光灯のジーという音が、やけに大きく聞こえた。

僕は目を閉じた。終わった。全部、終わりだ。東京のとき  
と同じだ。バレた。この身体を見られた。気持ち悪いと思わ  
れて、もうここにも居られなくなる——

「……知ってた」

「——え？」

目を開ける。

氷室さんの顔は、無表情だった。いつもと同じ。何の動揺  
もない。

「2年前、お前が入ってきた日から」

「……………な、に……？」



「冷凍庫から出るたびに歩き方が変わる。脚を閉じる。休憩室に一人で駆け込む。……全部見えてた」

声は低くて、静かで、抑揚がなかった。

2年間。

この人は2年間、知っていた。僕の秘密に気づいていて——黙っていた。

「な……なんで、黙ってたんですか……」

「お前が言わないなら、俺から言う必要はない」

涙が溢れた。止まらなかった。恐怖なのか、安堵なのか、自分でもわからない。ただ涙が止まらない。喉がひくひく痙攣して、呼吸がうまくできなかった。

「僕の身体……気持ち悪くないんですか……」

「……………」

氷室さんは答えなかった。代わりに、僕のボクサーパンツの——濡れた部分に、手のひらを当てた。

「ッ……！？♡♡」

「ここだけ熱いだろう。身体は冷えてるのに」

大きな手が、布越しに僕の秘部を包み込んだ。カントの形が、氷室さんの手のひらの中にすっぽり収まる。厚い掌の体温が、薄い布地を透過してじわりとそこに沁みた。

(あ……あつい……♡♡ 手が……あつ……♡♡)

「このまま放っておくと危ない。……温めるしかない」

「ひ、氷室さ……っ♡♡」

「剛でいい」

「……っ♡♡」

「名前で呼べ」

低くて、静かで——でも今までの業務命令とは違う響き。声の底に潜む熱が、鼓膜の奥に触れた。僕の腹の底がぞくりと震えた。

「……ごう……さん……♡♡」

言った瞬間、氷室さんの——剛さんの手が動いた。

ボクサーパンツの上から、指の腹でカントの割れ目をなぞる。

「んんっ……！♡♡♡」

布越しなのに、太い指の圧が直接肉に食い込んでくるみたいに伝わる。ぐしょぐしょに濡れたパンツが、指の動きに合わせてクチュ♡クチュ♡と音を立てた。

「こんなに出てる。……2年間、一人でどうにかしてたのか」

「っ……♡♡……聞かないで……っ♡♡」

「聞いてない。知ってる」

剛さんの目が、初めて感情を帯びた。黒い瞳の奥が微かに揺れている。虹彩の縁に薄く光が差して、いつもの鉄壁がほんの一瞬だけ——綻んだ。

「寮の壁は薄い。お前の部屋の隣が俺の部屋だ。夜勤明けにシャワー室で声殺してるのも、全部聞こえてた」

血の気が引いた。そして、一気に顔に昇る。耳の先まで焼けるように熱い。

「そ、んな……っ♡♡ 聞こえ……っ♡♡」

「全部」

剛さんの指が、パンツの端に引っかかった。ゆっくり、下ろしていく。

「っ……やめて……見ないで……♡♡」

「見る。もう隠すな」

ずるり、とパンツが太腿まで下ろされた。

蛍光灯の青白い光の下で、僕の——おまんこが、剛さんの目に晒される。

愛液でてらてらと光っていた。冷凍庫で溜まった分が太腿の付け根まで伝い落ちて、割れ目の周囲がぐちょぐちょに濡れている。甘い匂い。自分の体液の、ほんの微かに酸っぱくて甘い匂いが、暖房の温風に乗って鼻先を掠めた。

「う、あ……っ♡♡ 見ないで……っ♡♡ お願い……っ♡♡」

両手で顔を覆った。見られたくない。この身体を、他人に見せたことなんかない。東京で元彼にバレたときは服の上から触られたただけだった。こんなに露わにされたのは初めてで

---

「きれいだ」

「……………え？」

手の隙間から、剛さんを見た。

あの無表情が、少しだけ崩れていた。眉間の皺が消えて、唇が微かに開いている。瞳孔が——開いていた。喉仏が、一度だけ上下した。

「きれい、だ」

もう一度、噛みしめるように言って——剛さんの指が、直接カントに触れた。

「ひ……ッ♡♡♡」

背骨を電流が駆け上がった。節くれだった太い指。製氷機のメンテナンスで鍛えられた、硬くて大きい指。その指の腹が、僕のいちばん柔らかい場所をそっと撫でる。肌と肌。何も隔てるものがない直接の感触に——頭の奥で火花が散った。

「あ……っ♡♡ っ……♡♡ あっ♡ あっ♡♡」

「力抜け。こわばってる」

「むり……っ♡♡ こわ……っ♡♡ だって……初めて……他人に触られるの……♡♡」

「初めて？」

剛さんの指が止まった。

「……誰にも触らせたことないのか」

「……ないです……♡♡ 自分で……もあんまり……っ♡♡ この身体、嫌いだから……っ♡♡」

沈黙が落ちた。蛍光灯の微かなジーという音と、窓の外で吹雪がシャッターを叩く低い唸りだけが鳴っている。

そして剛さんは、僕の身体を抱え起こした。背中からぐると腕を回して、自分の胸に引き寄せる。僕の背中が、剛さんの厚い胸板にぴったりくっついた。ワークシャツの布越しに、心臓の鼓動が伝わる。規則正しいようで——ほんの少し、速い。

ブランケットが二人の身体にかけられる。

「温める。じっとしてろ」

耳のすぐ後ろで囁かれて、その低い声が鼓膜を震わせた。吐息が耳の産毛を掠めていく。コーヒーの匂いがした。さっきまで事務所で飲んでいたブラックの、苦い残り香。

「ん……っ♡♡」

後ろから抱きしめられている。186センチの大きな身体に、164センチの僕が完全に包まれている。剛さんの腕が僕の腹の前で組まれて、体温がじわじわと背中から浸透してくる。

温かい。

冷え切っていた指先や肩や足の甲に、少しずつ感覚が戻ってくる。痺れていた皮膚がちりちりと目を覚ます。と同時に——下腹部の疼きが、また強くなった。

(だめ……っ♡♡ 温まったら……またおまんこが……っ♡♡)

剛さんの手が、僕の腹の上にある。その手がゆっくり、下に滑った。

「ッ……♡♡」

「ここが冷えてる」

嘘だ。ここだけは冷えていない。ここだけは最初からずっと熱い。剛さんはそれを知っている。知っていて、触れる口実にしている。——その不器用な嘘が、おかしいくらい優しかった。

指先が下腹部に届いた。恥丘のすぐ上。産毛を撫でるように、爪の先がさらりと肌を掠める。

「んんっ……♡♡ ご、剛さん……っ♡♡」

「呼んだか」

呼んだわけじゃない。名前が勝手に出た。剛さんの手が、カントの割れ目の上端に触れて、指の腹で円を描くように撫で始めたから。

ぬる……♡♡ ぬるり……♡♡

愛液が指を濡らす。僕が一人のときに触るよりもずっと多く出ている。剛さんの指が、僕の愛液をゆっくり全体に塗り広げていく。指の腹が通った後がぬるぬると光を弾いて、肌がひやりとして、すぐにまた熱くなった。

「あっ♡ あっ♡ やっ……♡♡ そこ……っ♡♡」

「ここか？」

クリトリスの上に指先が乗った。

「ひんっ♡♡♡」

膝が跳ねた。剛さんの腕の中で、身体がびくりと痙攣する。

「敏感だな」

「だ……だって……自分でも……あんまり触ったこと……

♡♡」

「そうか。……じゃあ俺が教えてやる。お前の身体がどこで気持ちよくなるか」

低い声が耳の奥に流れ込んでくる。鼓膜の裏側をざらりと撫でるような声。

その声だけで——おまんこの中がきゅうっ♡♡と締まった。

（ッ……やだ……っ♡♡ 声だけで反応してる……♡♡ 男なのに……男なのにこんなの……♡♡）

指がクリトリスの周りを円を描いてゆっくり回る。皮の上からだったのが、だんだん直接触れるようになって、充血して膨らんだ小さな突起を指の腹でくり♡くり♡と転がされた。

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡ あああっ♡♡ ごう、さ……っ♡♡」

「足、開け」

「む、り……っ♡♡ 恥ずかし……っ♡♡」

「開けないと、指が動かせない」

後ろから太腿の内側に大きな手が差し入れられて、ぐいと膝を割られた。抵抗する力なんかなかった。脚が開かされて、おまんこが完全に剛さんの手の支配下に入る。

「ん……♡♡ やだ……やだ……♡♡ 音……鳴ってる……♡♡」

くちゅ♡くちゅ♡くちゅ♡

愛液の音がブランケットの中から響く。外では吹雪がシャッターを叩いている。その轟音に紛れて、でも二人の間では確かに聞こえる、淫らな水音。

「すごい量だな。……冷凍庫に入るたびに、こんなに溜まっていたのか」

「聞かないでっ♡♡ お願い……っ♡♡ 恥ずかし……っ♡♡」

「恥ずかしいことじゃない。お前の身体が正常に反応してるだけだ」

「正常じゃないっ♡♡ 男なのに……っ♡♡ おまんこなんか付いてるの……正常じゃ……っ♡♡」

言いかけた言葉が途切れた。剛さんの指が、カントの入り口に触れたから。

ぬる……♡♡

一本の指先が、割れ目に沿って下に滑り、入り口の縁をなぞった。ぷくりと膨らんだ肉の襞が、指の腹で優しく押し開



かれる。じわ……♡♡と壁の隙間から愛液が滲んで、指先をぬるく濡らした。

「っ……♡♡そこ……中……っ♡♡」

「入れるぞ」

「あ……待っ……♡♡」

待ってくれなかった。

ずぶ……♡♡

太い指が一本、ゆっくりとカントの中に入った。

「ひあぁっ♡♡♡」

背中が反った。剛さんの胸板に押し付けられる格好で、身体が弓なりになる。指一本なのに、圧がすごい。自分の細い指とは比べものにならない太さと長さが、膣の入り口を押し広げて中に侵入してくる。第一関節、第二関節——指の付け根まで、じわじわと中を満たされていく。

「きつい。……本当に何も入れたことないんだな」

「ないっ……って言ったでしょ……っ♡♡あっ♡♡あっ♡♡おくっ……♡♡」

指がゆっくり奥へ進む。中の壁に沿って、探るように曲がった。

「ここか？」

「ッッ♡♡♡」

膣壁のざらついた場所を、指先がずり♡と撫でた。

全身に火花が散った。

「ああっ♡♡ そこっ♡♡ そこだめ♡♡ だめっ♡♡♡」

「だめじゃない。お前が一番感じる場所だ」

（な……なんでっ♡♡ 初めて触ってるのに♡♡ どうしてそこ  
がわかるの……っ♡♡）

2年間、観察していたと言った。冷凍庫から出るたびの歩き  
方の変化、脚の閉じ方、休憩室で蹲る姿勢——全部。この人  
は僕の身体の癖を、僕自身より知っている。その事実が、怖  
くて——でも、どこか温かかった。ずっと見ていてくれた。  
ずっと、黙って。

「あっ♡あっ♡あっ♡ ごうさっ♡♡ あっ♡ あっ♡ んんっ  
♡♡♡」

一本の指が中で曲がって、ざらついた壁面をこり♡こり♡  
と小刻みに刺激する。同時に親指がクリトリスに乗って、く  
るくる♡♡と回された。

（上と中……同時に……っ♡♡ だめ……頭おかしくなる……  
っ♡♡）

「もう一本入れる」

「むりっ♡♡ むりむり……っ♡♡」

「入る。お前の身体は、ちゃんと開いてくれてる」

ずぷ……♡♡